新しい男性役割尺度の開発と信頼性・妥当性の検討

渡邊 寛¹ 筑波大学

Development of the new male roles scale: Reliability and validity

Yutaka Watanabe (University of Tsukuba)

Recently, with gender equality advancing within society, men are increasingly being expected to undertake other, non-traditional, roles. The aim of this study was to develop the new male roles scale, and examine its reliability and validity. Study 1 showed that the new male roles scale consisted following four factors; Attentiveness to Women, Commitment to Household Responsibility, Consideration for Others, and Emancipation from Emotional Restriction and Toughness. In study 2, four items for each factor were chosen and goodness of fit of this scale was confirmed. Furthermore, the result revealed that this scale had certain validity. Study3 showed that this scale had time stability, except for Commitment to Household Responsibility. However, its internal reliability was confirmed in study 2. These results suggest that this scale has certain reliability and validity. Finally, the relationship between this scale and previous researches was discussed.

Key words: gender role, male roles, masculinity.

The Japanese Journal of Psychology

2017, Vol. 88, No. 3, pp. 251–259

J-STAGE Advanced published date: March 10, 2017, doi.org/10.4992/jjpsy.88.16210

近年、男性に期待される性役割（以下、男性役割とする）が多様化している。本研究では、これまでの伝統的な男性役割とは異なる、新しい男性役割をとらえる尺度を開発する。

これまで、男性役割は海外において知見が蓄積され、複数の尺度が作成されてきた（Thompson & Pleck, 1986; Levant et al., 1992）。鈴木（1994a）は、1994 年までの男性役割研究を整理して、「職業上の成功と達成」、「肉体的／精神的強さと独立心」、「感情表出の制限」、「女々しくないこと」の 4 つにまとめた。このような伝統的な男性役割は、女性役割（女性に期待される性役割）に比べて社会的に望ましいものとされてきた（伊藤, 1978）。このため、男性が伝統的な男性役割に沿わないことは、女性が女性役割から逸脱するよりも社会的な罰が大きいことが明らかになっている

（Moss-Racusin, Phelan, & Rudman, 2010）。

他方で、性役割観は時代により変化している。女性の活躍推進に関する世論調査（内閣府, 2014）によると、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方について、1992 年の調査では賛成が 60.1%、反対が 34.0%であったが、2014 年の調査では賛成 44.6%、反対 49.4%であった。年々賛成が減少し、反対が増加しており、2014 年には約半数の者が性別役割分業に対して否定的な意見を持っていた。こうした性別役割分業への否定感に伴い、男女に求められる役割が固定的ではなくなり、男性役割も多様化していると考えられる。

Pleck（1976）は、1970 年代に、他者とのつながりを重視しない男性役割を「伝統的な男性役割（traditional male role）」とする一方で、対人的スキルを重視する男性役割を「現代的な男性役割（modern male role）」とした。ただし、前者は前述の通り数多くの研究が行われてきたが、後者はあまり検討されてこなかった。本研究では、Pleck（1976）の指摘に基づき、男性役割を内容により区別し、後者を「新しい男性役割」と称する。「新しい」という名称とした理由は、第一に、「現代的な」とすると、時代による区

Correspondence concerning this article should be sent to: Yutaka Watanabe, Graduate School of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba, Tennodai, Tsukuba 305-8572, Japan. (E-mail: sl521322@u.tsukuba.ac.jp)

¹ 本論文を作成するにあたり、ご指導を賜りました、筑波大学人間系 松井 豊教授に心より御礼申し上げます。

別が強調されてしまうため、第二に、これまで十分な検討が行われてこなかった領域であることを明示するため、第三に、既存のステレオタイプの枠組みを新しくするという意味を込めるためである。

これより、新しい男性役割の知見を紹介する。

多賀 (2011) は、会社員の男性への面接調査により、現代の男性には多様な男性役割が生じていることを明らかにした。具体的には、これまでの会社と強く結びついた画一的な男性役割ではなく、子育てに積極的に関わったり、仕事を会社や家族のためではなく、個人的な自己実現のためのものとしたりすることなどの多様な役割が生じていたという。

田中 (2015) は、社会学の立場から、現代の男性に求められる新たな能力として、常に相手の気持ちに配慮できるような「やさしさ」を挙げた。ただし、男性が女性をリードする側であることに変わりはないとして、「普段はやさしいが、いざという時は頼りになる」ことが必要であると論じた。また、前述のように伝統的な男性役割を整理した鈴木 (1994a) は、感情に基づいた人間関係を大切に、感受性と思いやりをもつという役割が、男性に新たに期待されていると主張している。ただし、Glick & Fiske (1996) は、男性が女性に対して好意的に振舞うことも、女性に対する差別を正当化するとして、好意的性差別を測定している (日本語版は、宇井・山本, 2001)。

このような新しい男性役割を測定する尺度として、Traditional-Liberated Content Scale (以下、TLCS とする) (Fiebert, 1983)、Opinions About Men's Roles (以下、OAMR とする) (Scherrer, 1990)、脱男性役割態度スケール (Scale of Attitudes toward the Role of Liberated Men: 以下、SARLM とする) (鈴木, 1994a)、Male Role Norms Inventory (以下、MRNI とする) (Levant et al., 1992) の下位尺度 Nontraditional Attitude (Levant & Fischer, 1998)、現代日本における男らしさ測定尺度 (大石・北方, 2013) が開発されている。なお、大石・北方 (2013) を除いて、2000 年代以降に作成された新しい男性役割を測定する尺度はみられなかった。

TLCS は、「伝統的な態度 (Traditional)」と「自由な態度 (Liberated)」の 2 因子から成り、後者が新しい男性役割を測定している。項目内容としては、社会・経済的な地位に縛られないこと、マッチョではないこと、感情表出の許容、育児をすること、身だしなみを整えることが含まれていた。ただし、1 因子であることから、新しい男性役割の多様な側面をとらえていないと考えられる。また、同尺度には女性役割を尋ねる項目も含まれており、測定対象が男性役割に限定されていなかった。

OAMR は、「家事」、「育児」、「経済的援助」の 3 因子から成る。「経済的援助」は、男性が女性にお金を払ってもらうなどの内容から成り、社会・経済的な地位に

縛られていないことを表す。

SARLM は、「男性の家事行動と男らしさの両立」、「強い男性像からの解放」、「男性による家事参加の重要性の認識」の 3 因子から成るが、尺度得点は 3 因子を合計して 1 因子として算出されていた。「強い男性像からの解放」には、社会・経済的な地位に縛られていないことや、マッチョではないこと、感情表出の許容、同性愛の許容が含まれていた。OAMR と SARLM は、主に男性の家庭参加に重きが置かれ、鈴木 (1994a) が指摘する、感情に基づいた人間関係や思いやりという内容が、項目に反映されていなかった。

MRNI は伝統的な男性役割を測定する 7 因子から成る尺度で、Levant & Fischer (1998) が Nontraditional Attitude 因子を付け加えた。項目内容としては、社会・経済的な地位に縛られていないこと、マッチョではないこと、感情表出の許容、同性愛の許容、女性へのやさしさ、身だしなみを整えることが含まれていた。ただし、1 因子で構成され、TLCS と同様に新しい男性役割の複数の側面を抽出していないと考えられる。

大石・北方 (2013) の現代日本における男らしさ測定尺度は、「社会的望ましさ」、「見た目のよさ」、「個性」、「豪快さ」、「精神的強さ」から成る。各因子には、鈴木 (1994a) が整理した伝統的な男性役割の 4 側面も含まれるため、伝統的な男性役割と新しい男性役割が明確に分けられてはいないと考えられる。

このように、新しい男性役割として、複数の側面が考えられた。そこで、渡邊・松井 (2016) は、新しい男性役割の側面を検討するため、自由記述調査を行い、数量化 3 類理論およびクラスター分析を行った。その結果、「女性をエスコートするカッコよさ」、「家庭への参加」、「他者への配慮」、「誠実さ」の 4 つのクラスターが新しい男性役割と考えられた。

以上に挙げた先行研究より、新しい男性役割は複数の側面から成ると考えられる。しかし、新しい男性役割を測定する尺度には、4 つの問題点があった。第一に、伝統的な男性役割と新しい男性役割が分けられていなかった (例えば、現代日本における男らしさ測定尺度)。「仕事と家庭の両立」に代表されるように、伝統的な男性役割と新しい男性役割は、両立可能な概念である。このため、伝統的な男性役割を測定する尺度のみでは、現在の男性に求められる男性役割を詳細に検討することができない。第二に、女性役割も含めて測定されていた (例えば、TLCS)。男性は、男性役割によって心理的な葛藤を抱えている (Eisler & Skidmore, 1987; O'Neil, Helms, Gable, David, & Wrightsman, 1986)。よって、日本で検討が不足している男性の心理的な葛藤を検討するためには、男女を含めた一般的な性役割観の平等志向性を測定する尺度では不十分と考えられる。第三に、男性役割が 1 因子としてとらえられていた (例えば、TLCS; MRNI)。伝

統的な男性役割尺度においては、多くの研究で複数の因子が抽出され、各因子が男性の心理的な葛藤や行動に異なる影響を与えていることが明らかになっている(林, 2005)。よって、新しい男性役割も複数の因子によって測定する必要があると考えられる。第四に、新しい男性役割の側面が網羅されているとは考えられない(例えば、TLCS; OAMR; SARLM)。特に、男性の他者への配慮(渡邊・松井, 2016)や思いやり(鈴木, 1994a)、やさしさ(田中, 2015)は、国内外を問わず、因子として抽出されていなかった。

男性に家庭参加ややさしさなど、複数の新しい男性役割が求められている現在、男性役割を求める男女の心理や、男性役割による男性の葛藤を検討するためには、以上の問題を解決した新しい尺度が必要であると考えられる。

そこで、本研究では、新しい男性役割の測定に特化した、複数の因子から成る尺度を開発することとした。研究1では、新しい男性役割の項目を作成し、尺度の構造を検討する。研究2では、研究1の構造を基に新しい男性役割尺度を開発し、基準関連妥当性を検討する。研究3では、研究2で開発した新しい男性役割尺度の基準関連妥当性を再検証し、再検査信頼性を検討する。

研究 1

新しい男性役割尺度の項目を作成し、因子構造を探索的に検討する。

方 法

調査時期 2015年10月から11月に実施した。

調査対象 東京都の4年制私立大学2校、茨城県の4年制国立大学、大阪府および兵庫県の4年制女子大学に通う大学生と、茨城県の専門学校に通う専門学校生の計592名を対象に調査を行った²。性別で3(その他)に○をつけた者および不明の者と、途中で回答を止めた者および不適切な回答をした者を除外した(以降も除外方針は同じ)。分析に用いた有効回答者は計498名(男性199名、女性299名、 $M = 19.56$ 歳、 $SD = 1.44$)であった。

調査内容 1. 属性として性別と年齢を尋ねた。

2. 新しい男性役割項目は、渡邊・松井(2016)の4クラスターと「感情表出の許容」が該当すると考えられた「強い男性像からの解放」(鈴木, 1994a)を基に、93項目を作成した。作成した項目は、社会心理学を専攻する複数の大学院生と1名の教員によって、項目の重複や意味の分かりやすさ、構成概念の検討が行われた。

回答の際には、項目数が多いことを考慮し、男性が女性と接するときの行動に関する18項目を「男性が女性と接するときの接し方」の設問とし、男性が一般的な他者と接するときの行動に関する27項目を「男性が(老若男女を問わず)他者と接するときの接し方」の設問とし、男性が家庭内で行う振る舞いに関する16項目を「男性の家庭での振る舞い方」の設問とし、それ以外の男性の行動やあるべき姿に関する32項目を「男性の普段のあり方」の設問として、設問を分けた。最初に「あなたが考える、男性のあるべき姿について、うかがいます」と教示した。その上で、それぞれの設問において、「—として、以下の各項目はあなたの考えにどの程度あてはまりますか」と教示し、7件法(1. まったくあてはまらない、2. ほとんどあてはまらない、3. あまりあてはまらない、4. どちらともいえない、5. 少しあてはまる、6. ある程度あてはまる、7. とてもあてはまる)で回答を求めた。

結果と考察

新しい男性役割尺度の構造 各項目の回答に対して、「まったくあてはまらない」を1点、「とてもあてはまる」を7点として得点化し、平均値および標準偏差を算出した。

新しい男性役割に関する93項目を用いて因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った。スクリー・プロットと解釈可能性から、5因子45項目を抽出した。回転前の5因子の累積寄与率は、45.7%であった。

第1因子は、「デートした時、男性が女性の分までお金を払うのは当然だ」、「女性と歩く際には、男性が車道側を歩くのが当然だ」などから成り、「女性への気遣い」と命名された。第2因子は、「家族の服を洗濯するのは、男性として当然だ」、「男性は、どんなに仕事が忙しくても、家事をするのが当たり前だ」などから成り、「家庭への参加」と命名された。第3因子は、「男性も感謝の言葉を口にすべきだ」、「何か物事を決定する時、男性は女性の意見に耳を傾けるべきだ」などから成り、「他者への配慮」と命名された。第4因子は、「辛いことがあれば、男性も泣くべきだ」、「男性も、疲れた時には『疲れた』と言うべきだ」などから成り、「強さからの解放」と命名された。第5因子は、「男性は話し上手であるべきだ」、「男性は、話しやすい雰囲気を持っているべきだ」などから成り、「話しやすい雰囲気」と命名された。

ただし、因子間相関をみると、「話しやすい雰囲気」は「女性への気遣い」と相関が高く、項目の意味内容が重複していると考えられた。また、「話しやすい雰囲気」の項目内容は、話しやすさのみを意味しており、他の因子に比べて測定概念に幅広さがみられなかった。加えて、先行研究においては、「話しやすい雰囲気」は新しい男性役割の側面として考えられなかった。こ

² 研究1, 2, 3は、それぞれ調査対象者が異なる。

これらの理由から、新しい男性役割尺度は、「話しやすい雰囲気」を除く 4 因子構造と考えられた。

研究 2

研究 1 の 4 因子構造を基に新しい男性役割尺度を開発し、基準関連妥当性を検証することを研究 2 の目的とする。研究 2 では、基準関連妥当性の指標として、共同性・作動性尺度 (Communion-Agency Scale: 以下、CAS とする) (土肥・廣川, 2004)、平等主義的性役割態度スケール短縮版 (Short-form of the Scale of Egalitarian Sex Role Attitudes: 以下、SESRA-S とする) (鈴木, 1994b)、SARLM を用いる。以下に基準関連妥当性に関する予測を述べる。

CAS は、他者と一緒にいる感覚、接触、解放、結合、契約的でない協力などを意味し、女性的特性とされてきた共同性と、自己擁護、自己主張、自己拡張、達成への促進、分離、孤独などを意味し、男性的特性とされてきた作動性それぞれの肯定的な側面と否定的な側面を測定する。「肯定的共同性」は、共同性の肯定的な側面 (配慮性) を測定しており、概して男性の配慮性を測定する新しい男性役割の全 4 因子と正の相関がみられると予想される。「肯定的作動性」は、作動性の肯定的側面 (自立性・行動力) を測定していることから、女性を気遣った行動を測定する「女性への気遣い」において、正の相関がみられると予想される。「否定的共同性」は、共同性の否定的な側面 (他者への依存性) を測定している。新しい男性役割尺度においては、「強さからの解放」が、伝統的な男性役割の「肉体的／精神的強さと独立心」(鈴木, 1994a) とは正反対の概念であり、他者への依存を測定している。よって、「否定的共同性」は「強さからの解放」と負の相関がみられると予想される。「否定的作動性」は、作動性の否定的な側面 (横暴さ) を測定している。男性の配慮性を測定する新しい男性役割尺度とは、全 4 因子で負の相関がみられると予想される。

SESRA-S は、性役割観の平等志向性を測定している。新しい男性役割尺度において、「女性への気遣い」は比較的伝統的な性役割観を、「家庭への参加」と「強さからの解放」は非伝統的な性役割観を測定する。よって、SESRA-S と「女性への気遣い」には負の相関が、「家庭への参加」と「強さからの解放」には正の相関が、それぞれみられると予想される。他方で、「他者への配慮」については、性役割観の伝統または平等志向性によらず男性に求められる概念を測定しており、SESRA-S とは無相関であることが予想される。

SARLM は、男性役割観の平等志向性を測定している。新しい男性役割尺度では、「女性への気遣い」が比較的伝統的な男性役割を、「家庭への参加」と「他者への配慮」、「強さからの解放」が非伝統的な男性役割を測定している。よって、SARLM は、「女性への

気遣い」と負の相関が、「家庭への参加」と「他者への配慮」、「強さからの解放」において正の相関が、それぞれみられると予想される。

方法

調査時期 2015 年 11 月から 12 月に実施した。

調査対象者 東京都と茨城県の 4 年制私立大学、茨城県の 4 年制国立大学に通う大学生計 679 名を対象に調査を行った。有効回答者は 631 名であった (男性 309 名、女性 322 名; $M = 19.64$ 歳, $SD = 2.24$)。

調査内容 1. 属性として、性別、年齢を尋ねた。

2. 新しい男性役割尺度は、研究 1 より 4 因子から成ると考えられた。しかし、「強さからの解放」に負荷の高い項目が少なかった。信頼性の高い尺度を作成するためには項目数を多くする必要がある。また、項目の多い因子については、各因子の内容を表す、必要十分な項目数で構成する必要があると考えた。そこで研究 2 では研究 1 の 4 因子構造を踏まえ、以下の手順により 37 項目を選定し、調査を行った。

第 1・第 2 因子については、項目数が多かったため、各因子を代表し、かつ内容に重複がないような、負荷の高い 8 項目をそれぞれ用いた。第 3 因子は、天井効果がみられる 2 項目 (「男性も感謝の言葉を口にすべきだ」、「男性は、人間関係のトラブルを暴力で解決しようとしてはいけない」) について、男性のみに求められる性役割ではなく、男女ともに求められる項目であると考えられたため、用いないこととした。その上で、第 3 因子は、他者への配慮を表す項目と、男女平等を表す項目から成っていたため、研究 1 の因子分析で負荷は高くなかったが、他者への配慮と男女平等に該当すると考えられた項目を併せて、計 22 項目で主成分分析を行った。そして、研究 1 から上記 2 項目を除いた 10 項目の他に、第 1 主成分に負荷の高い 3 項目の計 13 項目を採用した。第 4 因子については、「強さからの解放」に該当すると考えられたものの、因子分析で負荷が高くなかった項目も加えた計 14 項目で主成分分析を行い、研究 1 で残った 5 項目の他に、第 1 主成分に負荷の高い 3 項目の計 8 項目を採用した。

以上の手続きにより、研究 2 で用いる項目計 37 項目を決定した。

研究 1 では、項目の性質ごとに設問を分けたが、研究 2 では項目数が減ったことから、設問を分けずに、「男性のあるべき姿として、以下の各項目はあなたの考えにどの程度あてはまりますか」と修正して教示した。回答は、研究 1 と同様に 7 件法で求めた。

3. 共同性・作動性尺度 (CAS: 土肥・廣川, 2004) を用いた。CAS は、共同性と作動性の肯定的な面と否定的な面に関する 4 因子各 6 項目から成る尺度である。本研究における信頼性は十分高かった (「肯定的共同性」 $\alpha = .78$; 「肯定的作動性」 $\alpha = .82$; 「否定的共同性」

Table 1
新しい男性役割の確証的因子分析結果と記述統計

	標準化推定値	M	SD
女性への気遣い ($\alpha = .80$)			
女性と一緒にの時は、男性が車を運転するのが当たり前だ	.69	3.85	1.56
男性は、女性が通り過ぎるまで、出入り口のドアを手で押さえるべきだ	.73	4.02	1.61
デートした時、男性が女性の分までお金を払うのは当然だ	.68	3.40	1.73
女性と歩く際には、男性が車道側を歩くのが当然だ	.73	4.64	1.64
家庭への参加 ($\alpha = .78$)			
家族に料理を振る舞うことは、男性として当たり前だ	.76	3.50	1.25
家をきれいにするのは、男性の仕事だ	.80	3.55	1.21
泣いた子どもをあやすのは、男性の役目だ	.69	3.40	1.11
家族の服を洗濯するのは、男性として当然だ	.59	3.61	1.38
他者への配慮 ($\alpha = .77$)			
どんな時も、男性は周りの人を思いやる気持ちを忘れてはいけない	.73	5.36	1.30
男性は、他人に対して優しく接しなければならない	.77	5.13	1.27
男性は、人の意見を受け入れなければならない	.53	4.99	1.27
男性は、困っている人にはすすんで手を差しのべるべきだ	.65	5.33	1.30
強さからの解放 ($\alpha = .76$)			
男性も弱音を吐くべきだ	.81	5.23	1.34
男性も、疲れた時には「疲れた」と言うべきだ	.72	5.69	1.27
辛いことがあれば、男性も泣くべきだ	.67	5.53	1.27
男性は、どんな状況でもタフである必要はない	.48	5.59	1.33
因子間相関	2	3	4
1	.61	.45	-.27
2		.44	-.11
3			.13

$\alpha = .74$; 「否定的作動性」 $\alpha = .83$ 。

4. 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S: 鈴木, 1994b) を用いた。SESRA-S は、性役割の伝統志向性-平等志向性を測定する 15 項目から成る尺度である。本研究における信頼性は、十分高かった ($\alpha = .85$)。

5. 脱男性役割態度スケール (SARLM: 鈴木, 1994a) を用いた。SARLM は、男性役割に対する伝統志向性-平等志向性を測定する 10 項目から成る尺度である。信頼性は高くなかった ($\alpha = .55$) が、参考までに分析に使用することとした。

結果と考察

因子構造の検証 研究 1 の 4 因子構造を確認するために、すべての項目を用いて確証的因子分析を行ったが、適合度が低かった ($\chi^2 (979) = 4115.44$, GFI = .73, AGFI = .70, CFI = .71, RMSEA = .07, AIC = 4319.44)。そこで、項目を選定して新しい男性役割尺度を開発するために、各項目について想定した因子ごとに主成分

分析を行った。その上で、各因子の内容を網羅すると考えられる、各因子に負荷の高い上位 4・5 項目を用いて確証的因子分析を行った。その結果、全項目を用いたモデルよりも適合度が改善し、各 4 項目を用いたモデルの適合度が最も高かった (4 項目モデル: $\chi^2 (98) = 227.98$, GFI = .95, AGFI = .94, CFI = .96, RMSEA = .05, AIC = 303.98; 5 項目モデル: $\chi^2 (164) = 469.59$, GFI = .93, AGFI = .91, CFI = .92, RMSEA = .06, AIC = 561.59)。各項目の標準化推定値も .40 以上であった (Table 1)。各因子の信頼性も十分高かった ($\alpha s > .75$) ことから、このモデルを採用した。

基準関連妥当性の検証 次に、新しい男性役割尺度の尺度得点と、CAS の下位尺度、SESRA-S、SARLM との相関係数、および、新しい男性役割尺度の他の尺度得点を統制した時の、各測度との偏相関係数を算出した (Table 2)。「肯定的共同性」については、「家庭への参加」以外の 3 因子で正の偏相関がみられた。「肯定的作動性」は「女性への気遣い」の他に、「他者への配慮」とも正の偏相関がみられた。「否定的共同性」

Table 2
新しい男性役割の尺度得点と CAS, SESRA-S, SARLM との相関係数および偏相関係数

	肯定的共同性		肯定的作動性		否定的共同性		否定的作動性		SESRA-S		SARLM	
	<i>r</i>	<i>pr</i>	<i>r</i>	<i>pr</i>	<i>r</i>	<i>pr</i>	<i>r</i>	<i>pr</i>	<i>r</i>	<i>pr</i>	<i>r</i>	<i>pr</i>
女性への 気遣い	.12 **	.09 *	.18 ***	.12 **	-.02	.00	.06	.05	-.30 ***	-.28 ***	-.35 ***	-.27 ***
家庭への参加	.07	-.06	.10 *	-.02	-.02	.00	.00	.02	.04	.23 ***	-.10 *	.05
他者への配慮	.29 ***	.24 ***	.16 ***	.12 **	.03	.00	-.16 ***	-.14 ***	-.04	-.05	.02	.07
強さからの 解放	.23 ***	.21 ***	-.02	.00	.08 *	.08	-.22 ***	-.18 ***	.33 ***	.28 ***	.43 ***	.35 ***

注) *r* は相関係数を, *pr* は偏相関係数を表す。

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

では、有意な偏相関はみられなかった。「否定的作動性」では、「他者への配慮」の他に、「強さからの解放」とも負の偏相関がみられた。また、SESRA-S とは、想定通り、「女性への気遣い」で負の偏相関が、「家庭への参加」と「強さからの解放」で正の偏相関が、それぞれみられた。SARLM とは、「女性への気遣い」で負の偏相関が、「強さからの解放」で正の偏相関がそれぞれみられた³。

尺度得点に関する分析 各因子の平均値に関して、理論的中間値 (4) との差の検定を行った。その結果、「家庭への参加」の平均値は、理論的中間値よりも有意に低く ($t(627) = -12.54, p < .001$)、「他者への配慮」 $t(628) = 30.02, p < .001$) と「強さからの解放」($t(625) = 38.02, p < .001$) の平均値は、理論的中間値よりも有意に高かった。

次に、男女の尺度得点の t 検定を行った。その結果、「女性への気遣い」($t(624) = 12.88, p < .001, d = 1.03$) と「家庭への参加」($t(626) = 7.13, p < .001, d = 0.57$) で男性の得点が高く、「強さからの解放」($t(624) = -5.73, p < .001, d = 0.46$) で女性の得点が高かった。

研究 3

研究 2 で開発した新しい男性役割尺度の基準関連妥当性について、研究 2 とは異なる基準変数を用いて検証すると同時に、再検査信頼性を検討することを研究 3 の目的とする。

基準関連妥当性については、M-H-F スケール (伊藤, 1978) を用いた。M-H-F スケールは、男性性・女性性・人間性を表す性格特性語から成る。今回は、伊藤 (1978) において男性役割期待の認知を尋ねた教示を用いた。新しい男性役割尺度において、「女性への気遣い」に

男性が女性をリードするという意味が含まれ、伝統的な男性役割に類似する面をもつ。よって、「男性性」は「女性への気遣い」と正の相関がみられると予想される。他方で、「家庭への参加」や「他者への配慮」、「強さからの解放」は、伝統的な女性役割に近いと考えられる。よって、「女性性」は、「家庭への参加」や「強さからの解放」と正の相関がみられると予想される。また、「他者への配慮」は、感受性や思いやり (鈴木, 1994a) などの性質を表し、性別に関わらない人間的な側面である可能性がある。よって、「人間性」は、「他者への配慮」と正の相関がみられると予想される。

方 法

調査時期 2016 年 4 月から 5 月に第 1 回目の調査 (第 1 調査) を実施し、約 1 ヶ月後の同年 5 月から 6 月に第 2 回目の調査 (第 2 調査) を実施した。

調査対象者 東京都の 4 年制私立大学と茨城県の 4 年制国立大学に通う大学生を対象に調査を実施した。有効回答者は、第 1 調査では 269 名 (男性 112 名, 女性 157 名; $M = 19.79$ 歳, $SD = 1.42$)、第 2 調査では 212 名 (男性 87 名, 女性 125 名; $M = 19.68$ 歳, $SD = 1.44$) であった。第 1・第 2 調査共に回答した者は、158 名であった。

調査内容 1. 属性として性別と年齢を尋ねた。

2. 新しい男性役割尺度は、研究 2 で開発した 4 因子各 4 項目、計 16 項目を用いた。

3. M-H-F スケール (伊藤, 1978) を用いた。M-H-F スケールは、男性性・女性性・人間性を表す形容詞 (性格特性語) 各 10 項目、計 30 項目から成る。第 1 調査のみ使用し、本研究での信頼性は、十分であった (男性性 $\alpha = .94$; 女性性 $\alpha = .89$; 人間性 $\alpha = .93$)。

結果と考察

基準関連妥当性の検証 新しい男性役割尺度の尺度得点と、基準変数との相関係数、および、M-H-F スケールの他の尺度得点を統制した時の、基準変数との偏相

³ 男女別の偏相関係数も算出し、偏相関係数の差の検定を行ったところ、1 対 (「否定的共同性」と「強さからの解放」) 以外では有意な差はみられなかった。このため、男女の相関パターンにほとんど差はみられないと判断された。

Table 3
新しい男性役割の尺度得点と M-H-F スケールとの相関係数および偏相関係数

	男性性		女性性		人間性	
	<i>r</i>	<i>pr</i>	<i>r</i>	<i>pr</i>	<i>r</i>	<i>pr</i>
女性への気遣い	.39 ***	.31 ***	.23 ***	.11	.32 ***	.26 ***
家庭への参加	.21 ***	-.05	.34 ***	.22 ***	.17 **	-.07
他者への配慮	.41 ***	.29 ***	.30 ***	.15 *	.42 ***	.31 ***
強さからの解放	.12	.10	.19 ***	.20 ***	.19 **	.17 **

注) *r* は相関係数を, *pr* は偏相関係数を表す。

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

関係数を算出した (Table 3)。「男性性」では、「女性への気遣い」と「他者への配慮」と正の偏相関がみられた。「女性性」では、「家庭への参加」、「他者への配慮」、「強さからの解放」において正の偏相関がみられた。「人間性」では、「家庭への参加」以外で正の偏相関がみられた⁴。

再検査信頼性の検証 第1・第2調査共に回答した158名のデータを用いて、各因子の再検査信頼性係数(*r*)を算出した。その結果、「女性への気遣い」、「家庭への参加」、「他者への配慮」、「強さからの解放」の順に、.77, .57, .66, .64であった。高本・服部 (2015) は、再検査信頼性の中央値が.70であることを報告しており、若干低いものの、時間的安定性についてもある程度担保されたと考えられる。

総合考察

本研究では、新しい男性役割尺度を開発し、信頼性と妥当性を検討した。本節では、研究1から3を踏まえて、新しい男性役割尺度の構造と信頼性および妥当性、性差について述べる。

新しい男性役割の構造と信頼性・妥当性について

研究1では、先行研究を基に新しい男性役割の項目を作成し、新しい男性役割尺度の構造を検討した。その結果、新しい男性役割尺度を、「女性への気遣い」、「家庭への参加」、「他者への配慮」、「強さからの解放」の4因子により構成した。研究2・3では、これら4因子の基準関連妥当性を検討した。以下では、これらの側面の性質と、新しい男性役割に関する先行研究との対応を述べる。

第一に、「女性への気遣い」は、渡邊・松井 (2016) の「女性をエスコートするかっこよさ」や、女性に対する「やさしさ」(田中, 2015) に相当する。ただし、男性が女性をリードするという点は、伝統的な男性役

割に類似し、田中 (2015) が指摘する、「普段はやさしいが、いざという時は頼りになる」男性像を表していると推察される。実際、「女性への気遣い」は、CASの「肯定的共同性」と「肯定的作動性」、M-H-Fスケールの「男性性」、「人間性」とそれぞれ正の関連が、SESRA-SとSARLMとそれぞれ負の関連がみられた。これらの関連は、「女性への気遣い」が比較的伝統的な男性役割に近い一方で、誠実さや寛容さを併せた性質をもつことを表す。したがって、田中 (2015) の指摘に合致すると考えられる。

第二に、「家庭への参加」は、OAMRの「家事」、「育児」因子や、SARLMの「男性の家事行動と男らしさの両立」、「男性による家事参加の重要性の認識」因子、渡邊・松井 (2016) の「家庭への参加」に相当する。男女平等の進展による性別役割分業への否定感(内閣府, 2014)から、女性が担うことの多かった家庭役割が、男性役割を構成する一側面になったと考えられる。実際に、「家庭への参加」は、SESRA-SとM-H-Fスケールの「女性性」とそれぞれ正の関連がみられた。これらの関連は、「家庭への参加」が平等的な性別役割観を反映し、男性の献身性に関する因子であることを表す。したがって、性別役割分業への否定感(内閣府, 2014)や男性に思いやりが求められている(鈴木, 1994a)という現状と合致する。

第三に、「他者への配慮」は、渡邊・松井 (2016) の「他者への配慮」に相当する。鈴木 (1994a) は、感情に基づいた人間関係を大切に、感受性と思いやりをもつという役割が新しく男性に求められていると論じていた。実際に、「他者への配慮」は、CASの「肯定的共同性」と「肯定的作動性」、M-H-Fスケールの「男性性」と「女性性」と「人間性」とそれぞれ正の関連が、CASの「否定的作動性」と負の関連がみられた。これらの関連は、「他者への配慮」が他者への誠実さや献身、配慮といった社会的に望ましい性質をもつことを表す。加えて、研究2における「他者への配慮」の平均値は理論的中間値を上回っていた。したがって、鈴木 (1994a) の指摘と合致する因子と考えられる。なお、「他者への配慮」が「男性性」と関連がみられ

⁴ 男女別の偏相関係数も算出し、偏相関係数の差の検定を行ったところ、いずれも有意な差はみられなかった。このため、男女の相関パターンに差はみられないと判断された。

たことは、「他者への配慮」の項目（例えば、思いやり）と「男性性」の項目（例えば、指導力）が、どちらも上位の立場にいる者が下位の立場にいる者に対して行う行為である点で共通しているためと考えられる。

第四に、「強さからの解放」は、鈴木（1994a）の「強い男性像からの解放」や、渡邊・松井（2016）の「感情表出の許容」に相当する。伝統的な男性役割では、「肉体的／精神的強さと独立心」（鈴木，1994a）が含まれ、強い男性というイメージを内外に示すことが重要であった。しかし、「強さからの解放」は、CAS の「肯定的共同性」と SESRA-S, SARLM, M-H-F スケールの「女性性」と「人間性」とそれぞれ正の関連が、CAS の「否定的作動性」と負の関連がみられた。これらの関連は、「強さからの解放」が平等的な性役割観を反映し、男性が温かく繊細な心をもつことの重要性を表す。実際に、研究 2 における「強さからの解放」の平均値は理論的中間値を上回っていた。したがって、感受性や感情的な結びつきが男性に求められているという鈴木（1994a）の指摘と合致する。以上より、一定の妥当性が確認された。

信頼性については、内的一貫性と時間的安定性を検討した。内的一貫性については、研究 2 において、いずれの因子も十分に高かった。時間的安定性については、「家庭への参加」において低い値となった。「家庭への参加」で再検査信頼性が低かった理由としては、以下の 3 点が考えられる。第一に、本研究の調査対象者は、大学生や専門学校生であり、社会との接点が希薄である点である。そのため、家庭役割を現実のものとしてとらえられず、考え方が一貫していないと考えられる。第二に、第一の点とも重なるが、大学生や専門学校生は、性役割観が固定化する途上である点である。第三に、新しい男性役割が、その名の通り「新しい」ために、未だ頑健な態度を形成しにくい可能性も考えられる。ただし、他の因子については許容される時間的安定性が確保された。以上を総合して、新しい男性役割尺度はある程度の信頼性があると考えられた。

性 差

新しい男性役割に対する態度の差異について、男女で比較した。その結果、男性は女性よりも、男性が女性を気遣い、家庭に参加することを重要と考えていた。性別役割分業への否定感（内閣府，2014）や、他者との感情的な結びつきの重視（鈴木，1994a）により、男性が家庭役割の責任を果たすことや親密な者への情緒的な配慮を求める社会的な要請が高まり、男性は特に女性に気遣い、家庭に参加することの必要性を感じていると考えられる。一方で、男性は女性よりも、男性が弱さを表出することには否定的であった。「強さからの解放」は、弱さを見せることであり、「肉体的／精神的強さと独立心」などの伝統的な男性役割（鈴

木，1994a）とは正反対の因子であると考えられる。よって、弱さを見せることは、伝統的な男性役割から逸脱することになる。伝統的な男性役割から逸脱すると社会的罰が下される危険がある（Moss-Racusin et al., 2010）ことから、伝統的な男性役割に沿わない「強さからの解放」に対して、男性は否定的であったと考えられる。以上より、男性は特に女性を気遣い、従来女性役割とされてきた家庭役割を担おうとする意識が高まっているが、男性自身が弱さを表出することには抵抗感をもっていると推察された。

なお、「女性への気遣い」は、女性へのマナーや配慮を表しており、項目表現としては好意的性差別（宇井・山本，2001）と一致していない。しかし、「女性への気遣い」と好意的性差別は、女性を庇護すべき対象であるとする態度が共通している可能性も考えられ、やさしさや誠実さ（田中，2015）を伴う気遣いであるかどうかには疑問が残る。こうしたことから、男性は女性への気遣いをよいことであると思う一方で、女性はやさしさを表す気遣いであると認識せず、「女性への気遣い」における性差につながったとも考えられる。

本研究の意義と今後の展望

以上より、本研究の目的は一定程度達成された。これまで、日本において男性役割に関する実証的研究は少なかった。本研究により、新しい男性役割の側面を明確に分けたことで、新しい男性役割を求める心理的背景や、新しい男性役割により生じる男性の心理（葛藤を含む）について、詳細に検討することが可能となった。

今後は、他の世代に対する尺度の一般化可能性や、他の心理変数との関連を検討し、継続的な妥当性検証ならびに男性役割にまつわる男女の心理について明らかにすることが求められる。内閣府（2015）は、女性の活躍推進のためにも、男性の働き方や暮らし方の改善が必要と提言している。男性の働き方や暮らし方には男性役割とそれに伴う男性の葛藤が関わっていると考えられることから、男性役割を多面的にとらえた実証研究を行うことで、男女共同参画社会のさらなる進展に貢献することが期待される。

引用文献

- 土肥 伊都子・廣川 空美（2004）. 共同性・作動性尺度（CAS）の作成と構成概念妥当性の検討——ジェンダー・パーソナリティの肯否両側面の測定——心理学研究, 75, 420–427.
- Eisler, R. M., & Skidmore, J. R. (1987). Masculine gender role stress: Scale development and component factors in the appraisal of stressful situations. *Behavior Modification*, 11, 123–136.

- Fiebert, M. S. (1983). Measuring traditional and liberated males' attitude. *Perceptual and Motor Skills*, 56, 83-86.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (1996). The ambivalent sexism inventory: Differentiating hostile and benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 519-536.
- 林 真一郎 (2005). 男性役割と感情制御 風間書房
- 伊藤 裕子 (1978). 性役割の認知に関する研究 教育心理学研究, 26, 1-11.
- Levant, R. F., & Fischer, J. (1998). The male role norms inventory. In C. M. Davis, W. H. Yarber, R. Bauserman, G. Schreer, & S. L. Davis (Eds.), *Sexuality-related measures: A compendium* (2nd ed., pp. 469-472). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Levant, R. F., Hirsch, L. S., Celentano, E., Cozza, T. M., Hill, S., MacEachern, M., ... Schnedeker, J. (1992). The male role: An investigation of contemporary norms. *Journal of Mental Health Counseling*, 14, 325-337.
- Moss-Racusin, C. A., Phelan, J. E., & Rudman, L. A. (2010). When men break the gender rules: Status incongruity and backlash against modest men. *Psychology of Men & Masculinity*, 11, 140-151.
- 内閣府 (2014). 「女性の活躍推進に関する世論調査」の概要 女性の活躍推進に関する世論調査 Retrieved from <http://survey.gov-online.go.jp/h26/h26-joseikatsuyaku/gairyaku.pdf> (2016年10月5日)
- 内閣府 (2015). 第1分野 男性中心型労働慣行等の変革と女性の活躍 第4次男女共同参画基本計画 Retrieved from http://www.gender.go.jp/about_danjo/basic_plans/4th/pdf/2-01.pdf (2016年10月5日)
- 大石 さおり・北方 晴子 (2013). 現代日本社会における男らしさ測定尺度の作成 文化学園紀要, 服装学・造形学研究, 44, 63-73.
- O'Neil, J. M., Helms, B. J., Gable, R. K., David, L., & Wrightsman, L. S. (1986). Gender-role conflict scale: College men's fear of femininity. *Sex Roles*, 14, 335-350.
- Pleck, J. H. (1976). The male sex role: Definitions, problems, and sources of change. *Journal of Social Issues*, 32, 155-164.
- Scherrer, A. R. (1990). Attitude toward the non-traditional male role. *Honors Theses, Paper309*, 1-19.
- 鈴木 淳子 (1994a). 脱男性役割態度スケール (SARLM) の作成 心理学研究, 64, 451-459.
- 鈴木 淳子 (1994b). 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成 心理学研究, 65, 34-41.
- 多賀 太 (編) (2011). 揺らぐサラリーマン生活——仕事と家庭のはざままで—— ミネルヴァ書房
- 高本 真寛・服部 環 (2015). 国内の心理学尺度作成論文における信頼性係数の利用動向 心理学評論, 58, 220-235.
- 田中 俊之 (2015). 男がつらいよ——希望の時代の希望の男性学—— KADOKAWA
- Thompson, E. H., & Pleck, J. P. (1986). The structure of male role norms. *American Behavioral Scientist*, 29, 531-543.
- 宇井 美代子・山本 真理子 (2001). Ambivalent Sexism Inventory (ASI) 日本語版の信頼性と妥当性の検討 日本社会心理学会第42回大会発表論文集, 300-301.
- 渡邊 寛・松井 豊 (2016). 新しい男性役割の側面に関する探索的検討 筑波大学心理学研究, 52, 85-95.

—— 2016. 7. 30 受稿, 2016. 11. 26 受理 ——